

機関番号：16301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520023

研究課題名（和文）ハイデガー存在思惟における「聖なるもの」の位相
—「倫理」の基底への問い—研究課題名（英文）The Phase of 'the Sacred Thing' in Heidegger's speculation of Being
-The Question to the foundation of the ethic-

研究代表者

寿 卓三 (KOTOBUKI TAKUZOU)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：30186712

研究成果の概要（和文）：

ハイデガーの存在思惟を「聖なるもの」という視点から捉え返すことによって、「倫理」を再構築する可能性を明らかにした。さらに、倫理の揺らぎの負の帰結が明白な教育の場面での「權威」の再生可能性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

We have clarified the possibility to rebuild "an ethic" by understanding Heidegger's speculation of Being from the viewpoint of "the sacred thing". Furthermore, we have clarified the possibility to rebuild "the authority" in the scene of the education that the negative conclusion of the fluctuation of the ethic is clear.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：哲学、倫理学、聖なるもの、教育

1. 研究開始当初の背景

「ナルシズム」の傾向と「道具的理性」の結合によって生じる「ソフトな独裁主義」は、「市民意識」を衰退させて「公共性」の地盤を切り崩し、民主主義を空洞化させていく。そして、このような状況下で進展するグローバリゼーションは、偏狭なナショナリズムやローカリズムを克服する力とはなりえず、むしろソフトな独裁主義を強化する危険性をもつ。また、競争原理の支配が、所得、職業威信、学歴という3変

数の相関性を高め、貧富の差を拡大し、社会の連帯意識を支えている協調のパターンを切り崩すとき、ロールズの指摘する自然的社会的不平等という事態は看過されることになる。そして、エリート層の責任感は空洞化し、公共性や市民意識の強調自体が、社会的弱者の声を「自己責任」という形で無視し、エリート層の既得権の確保という傾向を強化することになりかねない。

このような状況下にあつて、みんなの問題 (political) がワタシの問題 (personal) として立ち現れてくる地平を切り開くべく、公共性や市民意識の再構築ということが倫理をめぐる近年の課題となっている。

2. 研究の目的

みんなの問題 (political) がワタシの問題 (personal) として立ち現れてくる地平を切り開くために公共性や市民意識を再構築するという課題が単なる「べき論」にとどまるのではなく、我々一人一人の現実的課題として実感されるためには、自己を多様な外部に向かって開き、「無関係な外部」を自己の再発見、再生を可能にする「有意味な外部」へと変容させることが不可欠の前提となる。しかし、「公共の問題をおのが問題として関心しない」(和辻哲郎) ことが我々日本人の特質だとすれば、このような変容を現実化するのには容易なことではない。そこで、欲望を相互に制御しつつ社会的連帯という倫理を構築する可能性を切り開くという喫緊課題に 대응するために、本研究は以下の4点をその目的として遂行された。

- (1) ハイデガーの存在思惟を「聖なるもの」という視点から再構成する。
- (2) ハイデガーの存在思惟が、「自己」の多面性・複数性という地平と親和性を持つことを明らかにする。
- (3) ハイデガーの存在思惟における「聖なるもの」が、「倫理の基底」の解明という位置価値を持つことを明らかにする。
- (4) 「教育」を倫理の生成する場として再構築する可能性を探る。

3. 研究の方法

研究代表者の寿卓三は、1930年代以降のハイデガーのヘルダーリン論に注目し、「聖なるもの」という視点から「原存在の本質の守蔵」としての死、別言すれば、歴史的存在としての現存在の生を全うする可能性を切り開いていることの解明を目指す。研究分担者の上利博規は、ハイデガーの芸術論における「聖なるもの」の位相とデリダの芸術論における他者性および責任概念との関連性を考察することによって、ハイデガーの存在思惟のもつ倫理的意義を解明する。そして、研究分担者の森秀樹は、初期ハイデガーにおける思索の生成を、ルター解釈や現象学に対する独自の立場の確立を通してキリスト教哲学から離反していく過程として捉え返す。

これらの分担作業の進捗状況は、メールのやりとりや学会等の際に共有されると同時に、年度末には成果を持ち寄って討議し暫定的成果と次年度の課題を明らかにする機会をもった。また、学校現場の教員の授業事例に関する事例研究を行った。

4. 研究成果

主たる研究成果として以下の4点が上げられる。

(1) 「公共性」概念および「自律」概念の再構築の必要性

ハイデガーによる各私性という視点からの平均的的日常性批判を、ヘルダーリンとの創造的対話という通路を通して捉え返す研究を進めている。また、芸術と倫理との密接な関連性、「性の事実性」に関する歴史的考察も行っている。これらの研究によって、総駆り立て体制という同質化の圧力によって能動的関与が強要される〈共同社会 community〉に対して、個人の自律性を基盤としながら相互に支え合う〈協働社会 association〉を構想していく必要性、そして、「各私性」という位相の積極的可能性が明らかにされた。

(2) 日常的空間の多相性への問いとしての倫理的問いの再構成

アジアにおける文化の多様性・重層性という視点も加味しつつ、倫理と芸術との密接な連続性を日常生活空間の歴史的蓄積という視点から再把握、再構成することによって、倫理的問いを生活形式そのものへの問いとして再構成する必要性を明らかにした。

(3) 初期ハイデガーと聖なる次元との関係性

20世紀初頭のプロテスタント神学の中での論争という文脈の中で中世の神秘主義を読み直すことが、ハイデガーにとっての現象学受容にとって大きな背景になっており、かつ、このような問題意識が、ハイデガー以降の現象学においても「神学的転回」をめぐる論争という仕方で反復されていることを明らかにし、この問題が「聖なるもの」の位置づけの変容(現代における霊性の問題)と直結することを明らかにした。

(4) 協働的な学習を切り開く原理としての「聖なるもの」の解明

受験・選別という受動的能動を強いられる状況のなかで、学習者が、他者との協働関係を可能にする「溜め」や「有能感」を習得す

るのはきわめて困難なことである。このような状況を打破する上で、それぞれの学習者を根本において突き動かしているものが、単に利己的なものではなく、自他にとってよりよき状態を切り開きたいという願望、つまり「聖なるもの」への感応力が有効であることが明らかになった。この研究は、市民意識の育成という課題にも応えるものとなりうる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

寿 卓三 (研究代表者)

1 「政治空間における〈聖なるもの〉の位相」、『ハイデガー存在思惟における「聖なるもの」の位相―「倫理」の基底への問い―』研究成果報告書、査読無、2011 年、5-15 頁。

2 「死をめぐる断章―死の積極的可能性―」、愛媛大学教育学部紀要第 57 巻、査読無、2010 年、251-260 頁。

3 「「真理 (a-letheia) への原初的問い=哲学」の現場としての〈教育〉の可能性に向けて」、愛媛大学紀要第 56 巻、査読無、2009 年、301-310 頁。

4 「ハイデガー哲学における「公共性〈批判〉」の広表」、電子雑誌 Heidegger-Forum 3 巻、査読有、2009 年、13-28 頁。

5 「「公共性」と「開示性」とのあわい」、愛媛大学教育学部紀要第 55 巻、査読無、2008 年、1-26 頁。

6 「ハイデガー存在論における〈政治〉の位相―ハンナ・アーレントとの対質を通して―」、愛媛大学教育学部紀要 54 巻、査読無、2007 年、13-22 頁。

上利博規 (研究分担者)

7 「ハイデガーにおける精神と霊の倫理 または、ruah から囲い込みを開くデリダの倫理」、『ハイデガー存在思惟における「聖なるもの」の位相―「倫理」の基底への問い―』研究成果報告書、査読無、2011 年、17-29 頁。

8 「『百科全書』に見る art と職人技術 Arts and Crafts in Encyclopédie」、人文論集 (静岡大学人文学部) 60 巻、査読無、2009 年、1-21 頁。

森 秀樹 (研究分担者)

9 「ハイデガーの宗教的転回と現代における『宗教的なもの』」、『ハイデガー存在思惟における「聖なるもの」の位相―「倫理」の基底への問い―』研究成果報告書、査読無、2011 年、31-136 頁。

10 「哲学的「移行」と「新しい公共性」―グローバル化時代の市民性教育としての「子どものための哲学」(3)―」、単著、査読無、平成 22 年 9 月、『兵庫教育大学研究紀要』(兵庫教育大学紀要編集委員会) 第 37 巻、89-102 頁。

11 「哲学的活動による基本的信頼の育成―グローバル化時代の市民性教育としての「子どものための哲学」(2)―」、単著、査読無、平成 22 年 3 月、社会科学研究会編『社会系諸科学の探究』(法律文化社)、74-88 頁。

12 「再帰的近代のアポリアと市民性教育の課題―グローバル化時代の市民性教育としての「子どものための哲学」(1)―」、兵庫教育大学研究紀要第 35 巻、査読無、2009 年、89-102 頁。

13 「開示性の自然学的記述の意味、理想 No.680。査読無、2008 年、27-37 頁。

14 「初期ハイデガーのピュシス論の射程」、電子雑誌 Heidegger-Forum 2 巻、査読有、2008 年、76-89 頁。

[学会発表] (計 3 件)

寿 卓三 (研究代表者)

1 *The Characteristic of the Foundation of Political Behavior in Asia*, Colloque « Les mythes de fondation et l' Europe », Dijon, 18 et 19 novembre 2010

2 「ハイデガー存在論における「公共性〈批判〉」の広表」、ハイデガー・フォーラム第 3 回大会、2008 年、学習院大学

森 秀樹 (研究分担者)

3 「初期ハイデガーのピュシス論の射程」、ハイデガー・フォーラム第 2 回大会、2007 年、京都大学

[その他]

ホームページ等

愛媛大学教育学部紀要

<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~kiyou/>

ハイデガー・フォーラム

<http://www.shujitsu.ac.jp/shigaku/hf/in>

dex.htm

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寿 卓三 (KOTOBUKI TAKUZO)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：30186712

(2) 研究分担者

上利 博規 (AGARI HIRONORI)

静岡大学・人文学部・教授

研究者番号：20222523

森 秀樹 (MORI HIDEKI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：00274027